

Keiba Global Front Line



競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します

合田 直弘

11月4日にカリフォルニア州のサンタアニタで施行される第40回ブリーダーズCの、メイン競走として組まれているのが、総賞金600万ドル(約9億0156万円)のG1BCクラシック(d10F)だ。ここで1番人気が想定されるアークエンジェロ(牡3)を、今月のこのコラムの主役として取り上げたい。

アークエンジェロは、20年5月11日に、未出走馬モデリングの5番仔としてケンタッキー州で生まれた。父は、3歳夏のG1トラヴァーズSから4歳3月のG1ドバイワールドCまで、圧倒的強さでG1・4連勝を飾り、管理していた伯楽ボブ・バファートをして「自らが手掛けた最強馬」と言わしめたアロゲイトだ。叔母にG1ハリウッドスターレットS勝ち馬ストリーミングがいて、3代母が、米最優秀3歳牝馬のラグストウリッツース、G1ヘルモントS勝ち馬ジャジル、G1フェブラリー2着馬カジノドライヴらの母となった名牝ベターザンオナーと、背景に持つ牝系もなかなか上質である。なおかつ、祖母の父がストームキャットで、母の父がタピットと、代々交配されてきた種牡馬も一流だ。ところが、キンランド・セプテンバーセールにエントリートした母モデリングの牡馬は、主催者によって、セール5日目の上場となるブック3に振り分けられた。

血統背景からすると、驚くような低評価である。さすれば、当時の同馬は、見栄えがさほどよろしくなかったのだろうか。そして同馬はそこで、現在の馬主であるジョニー・イバート氏に、3万5千ドルというお値打ち価格で購買されている。

アークエンジェロは、東海岸を拠点とする女性調教師ジェナ・アントヌーチ厩舎から、2歳12月にデビュー。翌年の3月18日にガルフストリームパークで行われたメイドン(d8F)を制し、デビュー3戦目にして初勝利をあげた。ここで陣営が、同馬の次走に選択したのが、5月13日にベルモントパークで組まれていた、G3ピーターパンS(d9F)だった。ピーターパンSとは、米国3歳3冠最終戦のG1ヘルモントS(d12F)へ向けた、地元の前哨戦に位置付けられている1戦だ。近年では、14年にここを勝つてベルモントSに駒を進めたトナリストが、3冠最終戦の勝ち馬となっている。そのピーターパンSを、アークエンジェロは頭差の辛勝ながらも制し、重賞初挑戦初制覇を果たした。

ここで陣営は、大きな決断を迫られることになった。アークエンジェロはこの段階で、ベルモントSの登録がなかったのだ。同馬がベルモントSに出走するには、レース4日前に設けられていた最終登録の段階で、5万ドルの追加登録料を支払う

必要があった。ピーターパンSで1着賞金11万ドルを取得していた馬主のイバート氏は、躊躇うことなく追加登録の決断をし、アークエンジェロはベルモントSに出走することになった。

そのベルモントSを、アークエンジェロは快勝。女性調教師が管理する馬が米国3歳3冠競走を制したのは、これが史上初めてという快挙で、メディアはこれ大きく取り上げた。さらに言えば、アントヌーチ調教師が管理馬をG1に出走させたのは、開業14年目で初めてのことだったのだ。アークエンジェロはその後、8月26日にサラトガで行われた「真夏のダービー」G1トラヴァーズSにも優勝。北米競馬の頂点と言えるBCクラシックに、本命馬として出走することになった。半年前までほとんど無名だったジェナ・アントヌーチ調教師は、今や時の人となった。

今年のBCクラシックには、日本からウシバテソロー(牡6、父オルフェヴル)とデルマソトガケ(牡3、父マイन्दユアビスケツ)の2頭が参戦予定だ。両陣営とも、米国における経験も実績も決して豊富とは言えないが、臆することはない。1番人気馬の陣営も、初めての体験に、今頃は浮足立っているはずなのだ。

日本調教馬2頭の、健闘を祈りたい。